様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 １７ 日現在

機関番号：１３７０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2018
課題番号：１５Ｋ０４０２５

研究課題名（和文）行動決定心的過程モデルに基づく反社会性深化メカニズムの解明

研究課題名（英文）Revealing an exacerbating mechanism of antisociality based on the model of behavior making mental processes

研究代表者
吉澤　寛之（Yoshizawa, Hiroyuki）

岐阜大学・教育学研究科・准教授

研究者番号：７０４４９４５３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、意図性に基づき分類された行動決定心的過程（Behavior Making Mental Process: BMMP）が多様な反社会的行動を説明するモデルとして有効であることを確認した上で、縦断研究によりBMMPの各過程が相互に影響することで反社会性を深化させるメカニズムを解明した。続いて、biopsychosocialモデルに基づきBMMPに影響する内的・外的要因を明らかにすることで、リスクのある者の反社会性の深化を予防するための教育政策上の示唆と学校コンサルテーションを通じた具体的な介入法が提案された。

研究成果の学術的意義や社会的意義
BMMPモデルの検証により、無意識的に行われる行動決定が機能欠陥に基づく行動決定を助長するといった新たな知見が得られ、反社会性が深化するメカニズムが明らかになった。BMMPに影響する内的・外的要因の発達的軌跡に沿った検証により、意識的な行動決定や機能欠陥に基づく行動決定が幼少期の気質の影響を受けること、後者の行動決定は家庭で受ける暴力により助長され、親の監督によって抑制されることが明らかになった。これらの知見を子どもや家庭環境におけるリスク判定に援用し、学校へのコンサルテーションなどを通じて予防的抑止につなげることで、将来的な司法・刑法に関わる行政上の予算削減につながると考えられる。

研究成果の概要（英文）：This project confirmed predictive effectiveness of the model of behavior making mental processes composed of three different levels of intentionality in explaining a variety of antisocial behaviors. A longitudinal study examining reciprocal interactions among different processes in BMMP revealed a worsening mechanism of antisociality. We also found endogenous and exogenous factors influencing BMMP based on the biopsychosocial model. Finally, for the purpose of preventing exacerbation of antisociality at risk youths, we offered implications for educational policies and proposed practical interventions through school consultation.

研究分野：社会心理学

キーワード：社会系心理学　教育系心理学　反社会的行動　行動決定心的過程　意識・無意識　実行認知機能　内的・外的影響要因

１．研究開始当初の背景

平成 24 年中の刑法犯および刑法犯少年の検挙人員は高い水準を維持し、児童虐待、ドメスティックバイオレンス（DV）、ストーカー、いじめなどの社会問題化している反社会的行動の発生状況は近年顕著な増加傾向にある（警察庁, 2013）。心理学系の諸学会では、反社会的行動に関連するシンポジウムの開催は例年相当数にのぼる。こうした情勢は、社会的かつ学術的に反社会的行動を解明する研究が強く求められている証左である。

研究代表者はこれまでの研究プロジェクトにおいて反社会的行動の従来の研究蓄積と自らの研究知見を整理・統合し、反社会的行動に至る心的過程を、行動決定の際の意図性や意識レベルが以下 3 水準で異なる弁別的なモデルを提唱した。

- 意識的行動決定：意図的、道具的になされる反社会的行動
- 機能欠陥行動決定：衝動的、無計画で統制感が欠如した反社会的行動
- 無意識的行動決定：自覚なく習慣的に自動的、無意識でなされる反社会的行動

意識的行動決定に対応する研究領域には、社会的な情報を処理する際の誤りやゆがみを分析する社会的情報処理理論（e.g., Crick & Dodge, 1994; Huesmann, 1998）があげられる。機能欠陥行動決定に対応するのは自己制御理論（e.g., Gottefredson & Hirschi, 1990）や脳機能の欠陥に着目した研究群（e.g., Raine, 1993）、無意識的行動決定に対応するのは意思決定の無意識的・自動的な過程を分析する研究群（e.g., Berkowitz, 2008; Todorov & Bargh, 2002）である。

研究代表者は、犯罪白書などでも指摘のある非行少年の社会を捉える認識の問題としての社会的情報処理の誤りやゆがみと、利己的な行動のコントロールに関わる自己制御能力の低下に着目し、反社会的行動との関連を検討してきた。また、親の養育態度やしつけ、地域共同体における集合的有能感や住民間の交流が情報処理や自己制御に及ぼす影響を検討してきた。これらは意識的行動決定および機能欠陥行動決定に関連する成果である。さらに、無意識的行動決定に該当する反社会性潜在連合を測定する紙筆版測定法を開発し、学校や矯正施設などでの簡便な実施を可能としている。

ただし、これらの研究では行動決定心的過程（Behavior Making Mental Process: BMMP）の 3 水準の測定方法が部分的に開発され、非行経験など一部の反社会的行動との関連が立証されたにとどまることから、以下に示す複数の課題がある。

- BMMP の各過程により有効な説明が可能な反社会的行動のタイプが不明である。
- BMMP が相互に影響しながら反社会性を深化させる発達的メカニズムが不明である。
- BMMP に影響する内的・外的要因に関する検証が不十分である。
- BMMP と影響する内的・外的要因への介入の効果が不明である。

先駆的に一部の BMMP どうしの相互影響を検討した研究が学会発表賞を受賞し、これまでの研究や本プロジェクトを踏まえて提唱する理論モデルを示唆する研究を紹介した国際学会シンポジウムが社会心理学会の助成を受けるなど一定の評価を得たものの、上記視点に基づく包括的な検証はなされていない。

２．研究の目的

本研究では、BMMP の意識レベルの軸に反社会的行動研究で重視される行動抑制・促進系の軸を加えて 6 過程モデルへと発展させた上で、上記の複数課題の解消を目的とした包括的検証を行う。具体的には、以下の 4 つの研究を実施する。

- 冒頭で述べた非行に限定されない多様な反社会的行動との関連を検討し、BMMP による説明に適した反社会的行動タイプを明確化する。
- BMMP 各過程の相互因果関係を、パネル調査データを用い、交差遅延効果モデルに基づき分析・検証する。
- Dodge & Pettit (2003) の反社会的行動に関する biopsychosocial モデルに基づき、BMMP に影響する内的・外的要因に関する検討を行う。
- BMMP や内的・外的要因のリスクに介入する学校コンサルテーションを実施する。

本研究の BMMP モデルは、社会心理学および認知神経科学における従来の研究蓄積に、研究代表者のこれまでの研究知見を融合することで、反社会的行動の行動化を説明する包括理論を構築し、さらにはこの分野における諸研究の理論的統合をも加速させることが確実視される。同モデルの傍証（e.g., Arsenio & Lemerise, 2010; 大渕, 2011）はあったものの包括的な実証は不可能であったが、本研究においてモデルの構成指標に関する測定法の開発が完了することで新たに検証することを可能にした。内的・外的要因の影響を受けて形成される BMMP の各過程が、発達的変遷において相互影響しながら反社会性を深化させるメカニズムを、発達心理学で提唱された biopsychosocial モデルを援用した学際的アプローチにより検証可能にする特色もある。

BMMP モデルの検証により、反社会性が深化するメカニズムを同定することで、同じリスク要因を持った子どもでも反社会化が進む子どもとそうでない子どもとの弁別が可能となる。BMMP に影響する内的・外的要因の発達的軌跡に沿った検証により、反社会性の深化を食い止める環境改善策の提唱が可能となる。本研究で得られる知見は、反社会化の進行の予防的抑止に貢献することから、司法・刑法に関わる行政上の予算削減につながることが確実視される。

３．研究の方法

（1）　BMMP 各過程の測定指標の開発

未開発の BMMP 測定指標の開発に取り組んだ。開発済みの指標として、意識的行動決定は、個人が有する意図的な行動規範を反映した社会的ルールの知識構造や、認知的歪曲により測定された。機能欠陥行動決定は、反社会的行動との関連が強い脳の前頭前野に局在する実行認知機能の評価尺度（Behavioural Assessment of the Dysexecutive Syndrome の DEX）により測定された。無意識的行動決定は、紙筆版潜在的反社会性測定法により測定された。

これら開発済みの指標は、行動抑制系と行動促進系とに弁別されていない問題が指摘できる。反社会性は促進傾向と抑制傾向とに区別（近藤, 2004）されており、神経生理学的な基盤も確認されている（e.g., Quay, 1993）。本研究では、行動抑制系・促進系を弁別したモデルに基づいて、測定方法を改訂した。具体的には、機能欠陥行動決定として、行動抑制・賦活システム（Gray, 1982）測定尺度の邦訳版（高橋他, 2007）を反社会的行動の説明に適するよう改訂された非行接近／回避尺度（近藤, 2004）を用いた。また、行動促進系の脳機能に対応する測定指標がないため、扁桃体の機能不全に基づく共感性や罪悪感の欠如をあらわす Callous-Unemotional 特性の測定尺度を Frick & Hare (2001) の Antisocial Process Screening Device における CU 因子尺度を邦訳して作成した。行動抑制系の無意識的行動決定として、反社会性への回避的な潜在連合も測定可能にするため、紙筆版潜在的反社会性測定法を改訂した。

一般の小学生（児童期）から大学生（青年期後期）までの多様なサンプルを対象とした調査を実施した。

（2）　BMMP による説明が有効な反社会的行動タイプの弁別

非行に加え、冒頭で触れたいじめなどの社会問題化している多様な反社会的行動をも対象とした調査を行った。非行やいじめについて、小中学生、高校生、大学生を対象に、BMMP の指標と非行やいじめの経験を測定する調査を実施した。BMMP の各指標による非行やいじめの経験の説明力を比較する分析を実施した。

（3）　BMMP の相互影響メカニズムに関する縦断研究

県内の小中学生を対象に短期縦断調査を実施した。複数時点での BMMP 各過程の変化を追跡するパネル調査を実施し、得られたデータに対して交差遅延効果モデルによる分析を実施した。意識的行動決定の認知的歪曲が CU 特性を助長する可能性や、意識的行動決定が頻繁に活性化されることで潜在化・自動化し無意識的行動決定へと移行する可能性が想定された。

（4）　BMMP への内的・外的影響要因に関する縦断研究

上記の短期縦断調査では、併せて内的・外的影響要因に関する指標を測定した。内的要因である生物学的素因に関して Dodge & Pettit (2003) では、遺伝、遺伝子、出産前環境、気質などがあげられているが、本研究では BMMP に直接的（proximal factor）に影響する気質要因の影響を検証した。幼児期の気質を、武井他（2007）の幼児気質質問紙を回顧用に改訂して養育者から測定した。

外的要因である養育・しつけ、友人仲間、社会的文脈に関しては、研究分担者の科研費研究において子どもの社会化における家庭、友人・仲間集団、近隣住民、学校などの環境要因の影響を測定した実績があることから、その研究で扱われている指標を用いた。具体的には、養育者の養育態度（中澤, 2003）としつけ（安香他, 1990）、友人・仲間集団の友人関係機能（丹野, 2007）、近隣住民の集合的有能感（近隣の住人が居住者の共通の価値観を認識し、効果的な社会的コントロールを維持する際の弁別的な能力）、教師の指導（三隅・矢守, 1989）を測定した。

小中学生の主観的認知を測定する調査に併行して、小中学生の養育者に協力を求める調査も実施した。集団単位での分析に関しては、マルチレベル構造方程式モデル（尾崎他, 2019）を用いた。

（5）　BMMP や内的・外的要因のリスクに介入する学校コンサルテーション

上記の研究で得られたエビデンスに基づき、BMMP や内的・外的要因のリスクに介入する学校コンサルテーションを実施した。短期縦断調査で得られた追跡データを用いて、測定内容における集団や個人の相対的位置と経年変化に関する情報を学校に提供し、学校レベル、学級レベル、児童生徒（個人）レベルの各レベルにおける課題を解決するためのコンサルテーションを各校に実施した。

４．研究成果

（1）　BMMP 各過程の測定指標の開発

新規で開発された測定方法を用いて、一般の小学校 5 年生から高校 2 年生までの多様なサンプルを対象とした調査を実施した。小中学生の大規模サンプルを対象に、理論上の各過程に対応した因子構造が得られるか実証的に検討した結果、おおむね理論上の３因子に該当する因子構造が得られた。なお、認知的歪曲の責任の外在化は逆転項目で構成され、非行接近／回避の非行抑制性は恐怖機能不全モデル（e.g., Lykken, 1995）で説明される別の心的過程であること

から、今後はこれらの測定指標の改善や心的過程の構造の見直しが求められた。

（2）　BMMP による説明が有効な反社会的行動タイプの弁別

大学生を対象に 3 つの行動決定過程を測定し、反社会的行動の経験に対する予測性を検証した結果、非行接近／回避の刺激興奮性と潜在的反社会性による予測性が高く、一般攻撃信念は他者に害を加える反社会的行動に対する固有の影響を持つことが明らかとなった。また、高校生を対象に、いじめ加害行動、非行への態度、友人の非行行動との関連を検討した結果、いじめ加害行動に対しては意識的行動決定や機能欠陥行動決定の各過程の有意な影響がおおむね認められた。自己に害のある反社会的行動に対しては非行接近／回避の刺激興奮性や非行抑制性の影響が有意であり、他者に害を加える反社会的行動に対しては一般攻撃信念や社会的自己制御における自己抑制の影響が有意であったことから、大学生で得られた結果と部分的に一貫する結果が得られた。友人非行行動に対しては CU 特性の有意な影響がみられ、冷淡さや情緒性の欠如が非行仲間との共存を促していた。

（3）　BMMP の相互影響メカニズムに関する縦断研究

各過程が相互に影響して反社会性を深化させるメカニズムを解明するため、小中学生対象の 3 時点の縦断調査データを用いて時系列的な相互影響を検討した。意識的行動決定と機能欠陥行動決定の各下位尺度に潜在因子、潜在的反社会性を含めた同時点の 3 行動決定間に共分散、前後 2 時点間の行動決定指標間のすべてのパスを仮定した交差遅延効果モデルを分析した（図１）。無意識的行動決定と機能欠陥行動決定に 3 時点の安定効果があり、意識的行動決定には認められなかった。交差遅れ効果は、T1 と T2 の無意識的行動決定がそれぞれ、T2 と T3 の機能欠陥行動決定に正の影響を与える頑健な結果が認められた。従来の研究では無意識的行動決定の影響を意識的行動決定の影響によると誤認する可能性が指摘されてきたが、本研究により無意識的行動決定が機能欠陥行動決定を助長するといった新たな知見も得られた。

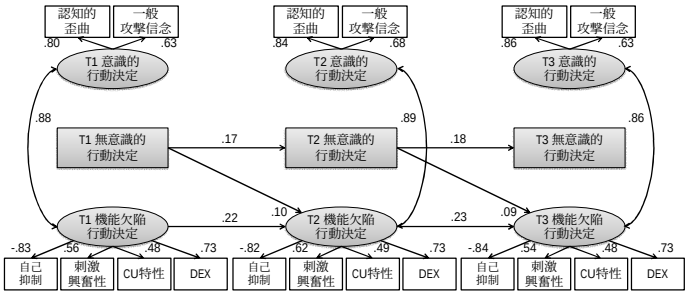

図１　時系列的な相互影響過程の分析結果

（4）　BMMP への内的・外的影響要因に関する縦断研究

biopsychosocial モデルに基づき、幼少期の気質および家庭や地域社会の環境が小中学生時点の BMMP に及ぼす影響を検討した。意識的行動決定へは、気質の外向性に有意な正の影響、気質の規則性に有意な負の影響があった。機能欠陥行動決定へは、気質の否定的感情反応・順応性・外向性と家庭の暴力に有意な正の影響、家庭の監督に有意な負の影響があった。無意識的行動決定には有意な影響がなかった。幼少期の気質が小中学生時点の行動決定に影響するという知見に加え、先行研究を踏襲する家庭の暴力や監督の影響が認められた。

（5）　BMMP や内的・外的要因のリスクに介入する学校コンサルテーション

縦断調査に協力した学校を対象に、測定データに基づき、学校レベル、学級レベル、児童生徒レベルの各レベルにおいてリスクのある学校、学級、個人を同定した。さらに、経年変化に基づいて、前年度からリスクが急激に上昇するなど、緊急の支援の必要性についても指標化した。各学校の学校管理職や学年主任、学級担任に対して、BMMP のリスクとそれに影響する内的・外的要因のリスクに応じた介入方法をコンサルテーションの形態により提案した。積極的に提案通りの介入を実施した学校は、それ以外の学校と比較して、BMMP や問題行動の有意な改善が認められた。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計１３件）

① 吉田琢哉・吉澤寛之・浅野良輔・玉井颯一・吉田俊和　(2019).　社会化エージェントが社会的認知バイアスに及ぼす影響—親の養育、教師の指導、友人の非行、地域の集合的有能感を指標とした検討—　教育心理学研究, 67(4), 印刷中. 査読有

② 吉澤寛之・吉田俊和・中島 誠・吉田琢哉・原田知佳　(2019).　地域住民の関与・雰囲気が集合的有能感を介して子どもの反社会性に及ぼす影響—層化抽出法を用いたマルチレベル分析による検討—　応用心理学研究, 45(1), 印刷中. 査読有

③ 吉澤寛之　(2019).　指定討論 (pp. 212-217) 相馬敏彦・伊藤言・山中多民子・村上史朗・吉澤寛之 日本応用心理学会平成 29 年度公開シンポジウム 暴力的な絆はなぜ生じるのか—DV の予防に向けて—　応用心理学研究, 44(3), 193-217. 査読有

④ 奥村尚浩・吉澤寛之　(2018).　児童の社会性および教師の指導の学級差が社会性の学年差

にもたらす負の効果　岐阜大学教育学部研究報告人文科学, 67(1), 139-147. 査読無
(http://www.ed.gifu-u.ac.jp/~kyoiku/info/zinbun/pdf/670116.pdf)

⑤ 吉澤寛之　(2018).　子どもの反社会性への社会的影響 (pp. 267-269) 平石賢二・河野荘子・笠井清登・大久保智生・吉澤寛之・齊藤誠一 準備委員会企画シンポジウム 4 思春期における発達と問題行動　教育心理学年報, 57, 264-272. 査読有　DOI: 10.5926/arepj.57.264

⑥ 玉井颯一・吉田琢哉・原田知佳・吉澤寛之・浅野良輔・吉田俊和　(2018).　仲間関係と教師の指導が中学生の共感性に及ぼす影響—2 時点の縦断データに基づく検討—　東海心理学研究, 12, 47-54. 査読有

⑦ 山田恭子・吉澤寛之　(2017).　教師・保護者・友人のはたらきかけが本来感と自尊感情に及ぼす影響—心理的 well-being の向上を目指した検討—　岐阜大学教育学部研究報告人文科学, 66(1), 241-250. 査読無
(http://www.ed.gifu-u.ac.jp/~kyoiku/info/zinbun/pdf/660125.pdf)

⑧ 吉澤寛之・吉田琢哉・原田知佳・浅野良輔・玉井颯一・吉田俊和　(2017).　養育・しつけが反社会的行動に及ぼす弁別的影響—適応性を考慮した社会的情報処理による媒介過程—　教育心理学研究, 65(2), 281-294. 査読有　DOI: 10.5926/jjep.65.281

⑨ Yoshizawa, H., Yoshida, T., Park, H., Nakajima, M., Ozeki, M., & Harada, C.　(2016). Neighborhood interaction factors versus social compositions in predicting youth socialization development—An international research—　Japanese Journal of Applied Psychology, 42(Special edition), 25-35. 査読有

⑩ 大澤久乃・吉澤寛之　(2016).　小学校全校規模の社会的情報処理と学校適応のアセスメント—情動過程を伴った社会的情報処理への介入の事前測定として—　岐阜大学教育学部研究報告人文科学, 65(1), 177-186. 査読無
(http://www.ed.gifu-u.ac.jp/info/zinbun/pdf/650118.pdf)

⑪ 浅野良輔・吉澤寛之・吉田琢哉・原田知佳・玉井颯一・吉田俊和　(2016).　養育者の養育態度が青年の養育認知を介して社会化に与える影響　心理学研究, 87(3), 284-293. 査読有　DOI: 10.4992/jjpsy.87.15013

⑫ 木村友里恵・吉澤寛之　(2015).　感情過程を導入した社会的情報処理測定法の開発—学校実施を想定した児童版測定法—　岐阜大学教育学部研究報告人文科学, 64(1), 153-161. 査読無
(http://www.ed.gifu-u.ac.jp/~kyoiku/info/zinbun/pdf/640115.pdf)

⑬ 吉澤寛之　(2015).　反社会的行動・精神的健康の先行要因としての社会的情報処理・自己制御—疑似相関の可能性の検証—　岐阜大学教育学部研究報告人文科学, 63(2), 173-181. 査読無
(http://www.ed.gifu-u.ac.jp/~kyoiku/info/zinbun/pdf/630215.pdf)

〔学会発表〕（計５３件）

① Yoshizawa, H., & Yoshida, T.　(2019, March).　Implicit antisocial mental process is a unique predictor of delinquency.　Poster session presented at the 2019 International Convention of Psychological Science, Paris, France.

② 吉澤寛之・吉田琢哉・浅野良輔・玉井颯一・吉田俊和　(2018).　反社会的行動の行動決定心的過程の因子構造に関する検討—小中学生対象の大規模サンプルデータを用いた検討—　日本社会心理学会第 59 回大会発表論文集, 304.

③ 吉澤寛之・吉田琢哉・原田知佳・浅野良輔・玉井颯一・吉田俊和　(2017).　社会化エージェントの多層的影響に関する研究（２６）—Mover-stayer 潜在移行分析によるエージェント資源と反社会性の関連の検討—　日本社会心理学会第 58 回大会発表論文集, 96.

④ 吉澤寛之・吉田俊和・吉田琢哉・原田知佳・浅野良輔・菅原ますみ　(2017).　社会化の担い手たちはいかにして子どもの社会性を育むのか——親・友人・教師・地域住民の多層的影響の実証的検討——　日本教育心理学会第 59 回総会発表論文集, 50.

⑤ 吉澤寛之　(2017).　子どもの反社会性への社会的影響　思春期における発達と問題行動（準備委員会企画シンポジウム話題提供）　日本教育心理学会第 59 回総会発表論文集, 9.

⑥ 吉澤寛之・吉田琢哉　(2017).　行動決定心的過程による反社会的行動の予測—高校生を対象としたいじめ加害経験・非行への態度・友人非行行動に基づく検討—　日本心理学会第 81 回大会発表論文集, 385.

⑦ Yoshizawa, H., Yoshida, T., Harada, C., Asano, R., Tamai, R., & Yoshida, T.　(2017, July). Effects of parenting and discipline on antisocial behavior mediated by adaptive and maladaptive social-information processing.　Oral session presented at the 15th European Congress of Psychology, Amsterdam, Netherlands.

⑧ 吉澤寛之・吉田琢哉・原田知佳・浅野良輔・玉井颯一・吉田俊和　(2016).　社会化エージェントの多層的影響に関する研究（１８）—エージェント潜在クラスが中学生の反社会性に及ぼす因果的影響—　日本社会心理学会第 57 回大会発表論文集, 69.

⑨ 吉澤寛之・吉田琢哉　(2016).　3 つの行動決定心的過程による反社会的行動の予測—大学生を対象とした行動経験に基づく検討—　日本パーソナリティ心理学会第 25 回大会発表

論文集, 106.

⑩ Yoshizawa, H., Yoshida, T., Nakajima, M., Yoshida, T., & Ozeki, M., & Harada, C. (2016, July). Effects of neighborhood commitment and atmosphere on antisociality mediated by collective efficacy: A multilevel study with stratified sampling. Oral session presented at the 31th International Congress of Psychology, Kobe, Japan.

⑪ Yoshizawa, H., Yoshida, T., & Fuchigami, Y. (2016, May). Comparison among three types of antisocial mental processes in predicting recidivism. Poster session presented at the 28th Annual Convention of American Psychological Science, Chicago, IL.

⑫ 吉澤寛之・渕上康幸 (2015). 反社会的行動を導く心的過程における非行少年と一般少年の比較 犯罪心理学研究, 53(特別号), 24-25.

⑬ 吉澤寛之・吉田琢哉・渕上康幸 (2015). 反社会的行動を導く心的過程による再犯性の予測 日本社会心理学会第 56 回大会発表論文集, 39.

⑭ 吉澤寛之・吉田琢哉・原田知佳・浅野良輔・玉井颯一・吉田俊和 (2015). 社会化エージェントの多層的影響に関する研究（１６）—中学生を対象としたエージェント潜在クラス間の反社会性の比較— 日本心理学会第 79 回大会発表論文集, 106.

⑮ Yoshizawa, H., Yoshida, T., Asano, R., & Tamai, R. (2015, July). Development and validation of a paper-and-pencil version of the Implicit Association Test to measure antisocial attitudes. Oral session presented at the 14th European Congress of Psychology, Milan, Italy.

〔図書〕（計 ３件）

① 吉澤寛之 (2016). 第 12 章 向社会的行動 大坊郁夫（監）・谷口淳一・金政祐司・木村昌紀・石盛真徳（編） 対人社会心理学の研究レシピ—実験実習の基礎から研究作法まで— 北大路書房 pp. 155-165. 総 315 頁

② 吉澤寛之・大西彩子・ジニ, G.・吉田俊和（編著） (2015). ゆがんだ認知が生み出す反社会的行動—その予防と改善の可能性— 北大路書房 総 270 頁

③ 吉澤寛之 (2015). 第 3 章 6 節 反社会的行動とサイコパス—理論的統合に向けた論考 有光興記・藤澤 文（編） モラルの心理学—理論・研究・道徳教育の実践— 北大路書房 pp. 116-127. 総 273 頁

〔産業財産権〕

○出願状況（計 ０件）

○取得状況（計 ０件）

〔その他〕

ホームページ等

https://researchmap.jp/read0133298/

６．研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：吉田 俊和

ローマ字氏名：Yoshida Toshikazu

所属研究機関名：岐阜聖徳学園大学

部局名：教育学部

職名：教授

研究者番号（8 桁）：70131216

(2)研究協力者

研究協力者氏名：吉田 琢哉

ローマ字氏名：Yoshida Takuya

研究協力者氏名：浅野 良輔

ローマ字氏名：Asano Ryosuke

研究協力者氏名：玉井 颯一

ローマ字氏名：Tamai Ryuichi